

# 東京から——蕭紅書簡（上）

翻訳と注釈

平 石 淑 子

中国の女性作家蕭紅（1911～42）は、1936年7月からおよそ半年、単身東京に留学し、日華学会が主催する東亜学校<sup>1)</sup>で日本語を学びながらいくつかの短い作品を書いている。『中国現代散文傑作選 1920→1940』（2016.2、勉誠出版）所収の「東京にて」<sup>2)</sup>は、その留学中に敬愛する師、魯迅を失った哀しみを描いたものである。

蕭紅がなぜ東京に来たのかについては、当時同居していた作家、蕭軍（1907～88）の女性関係が原因とされている<sup>3)</sup>。しかし蕭軍『蕭紅書簡輯存注釈録』（1981.1、黒龍江人民出版社、以下『注釈録』）に収録された蕭紅の手紙にそれを示唆するような内容のものは見られない。結局ふたりはその後戦火の中で袂を分かつことになるのだが、なぜ彼女の書簡が別れた蕭軍の手許に残されたのか。このいきさつについて、蕭軍は『注釈録』の前言に次のように述べている。

1938年初春の夜、蕭紅と山西省臨汾の駅で別れた時、私はこの書簡は彼女が西安に持って行くべきだということをすっかり忘れてしまっていた。翌日荷物を調べた時、書簡がまだ残っていることに気づいた。椅子の下に彼女の柿色のショートブーツが忘れられていたことにも。

汽車は昨夜のうちに出発してしまっている。恐らくもう西安に着いているだろう。（中略）

教員のT君が黄河を越えて西安に行くと言うので、私は彼にこの書簡を托した。それからそのほかのいくつかのもの、ブーツも西安で蕭紅に渡して貰うように、そして彼女に宛てて手紙を1通書いた。

（中略）

このT氏は西安には行かず、延安に行ったのだった。それから間もなく私も延安に行き、彼から包みが返された。

日中戦争終結後の内戦期、更に文化大革命の嵐を、この書簡の束は奇跡的にくぐり抜けた。『注釈録』に収録された東京からの書簡は全部で36通である<sup>4)</sup>。これらの書簡からは東京における彼女の生活の一端を垣間見ることができるほか、付された蕭軍の注釈から、彼らふたりの足跡及び関係が覗われ、興味深い。本稿は『注釈録』に収録された蕭紅の東京からの書簡を、蕭軍の注釈

などをナビゲーターとして読み込もうと試みるものである。なお文中の [ ] は訳者注である。

第一信 (1936年7月18日)<sup>5)</sup>

君先生 [蕭軍]<sup>6)</sup> :

海の色がもうすっかり暗くなりました。私は船尾に立って、海を見ながら考えています。私がひとりだったらどうしてこんな大海を渡れただろうかと<sup>7)</sup>。

これは日が暮れてからやっと書いた手紙です。船の中の空気が悪いので、出帆していくらも経たないうちから何度も吐き気に襲われました。胃薬をたくさん飲んだのに。

今船は長崎に停泊しています<sup>8)</sup>。ちょっと降りてみようと思います。昨日の手紙は書き終わらないうちにやめてしまいました。

東京に着いたらまた書きます。お元気で。

瑩 7月18日

源先生 [黄源] によろしく。 瑩

第二信 (1936年7月21日)

均 :

体の調子、この頃どうですか。よく眠れている? 引越して来た時、思いました。あなたが来ることはないけれど、もしあなたも一緒だったら、きっとこんなむしろ<sup>9)</sup>を見て真っ先に転がってみて、とてもいいって言うと思う。絵の中の部屋にいるみたいです。

あなたの手紙は許 [粵華] の所に出すといいわ。そこの大家さんはわかっているから。

許は海に行かないのですって。もう少し様子を見るけど、ひとりで行くかもしれない。

机ひとつと椅子ひとつはどちらも借りました。部屋の中はとても片付いていて、ちょっと寂しいくらい。どうしても何かが足りない気がする<sup>10)</sup>。でも何日か経てば慣れるわね。

外では蝉の鳴き声と、カタカタと変な靴 [下駄] の音<sup>11)</sup> がして、筆を執る気がしない。たぶん彼女たちがもうじき食事に連れ出してくれるはず。

葉は忘れずに飲むこと、ご飯は控えめにすること、プールに行って泳ぐのはいいけれど、もし体の調子がよくなかったら海で泳ぐのはとんでもないわ<sup>12)</sup>。

お元気で。

ほかの友人たちにもよろしく。

瑩 7月21日

第三信 (1936年7月26日)

均 :

今私はとても辛い、泣きたい。手紙を書こうとしたのに万年筆のインクがなくなりました。でもどうやっても入れられない、インクを入れてもちょっと押すとすぐ出てきてしまう。

華 [許粵華] は起きてすぐ図書館に行きました。私も行ってよかったのだけれど、家でちょっと何か書こうと思って。でもどうしても書けない。あなたがトントンと階段を上がって来る音が聞こえないから。

こちら暑いです。それに話す人もいない、読む本もない、新聞もない、気持ちがふさぐから町へ出てみたいけれど、道も分からないし、言葉も話せない。

昨日は神保町の本屋に行ってみました、その本屋は私とは全く関係がなかったようで、よく分からないものばかりでした。町中に下駄の音<sup>13)</sup>が響いていますが、どうしてもこの音には慣れません。こうやって毎日毎日どうやって過ごしていくのか、まるでシベリアに流罪になったみたいですね。

私たちが初めて上海に来た時よりもっとどうにもなりません<sup>14)</sup>。たぶん少しずつよくなるとは思いますが、長くかかると我慢できないかもしれない。あなたは今出発しようとしているところ<sup>15)</sup>？こちらに来てもう数日経ちましたが、どうしてあなたからの手紙が来ないのかしら。

珂〔張秀珂〕は16日にもう帰ってしまいました<sup>16)</sup>。

ここまでにします。食事に行かなければ。ちょっとぶらぶらして来るかもしれませんが。

吟 7月26日 10時半

#### 第四信（1936年8月14日）

均：

あなたの4日付の手紙を受け取ってから何日も経ちましたが、手紙を読んで安心しました。あなたが楽しそうで、それに元気そうだったから<sup>17)</sup>。

原稿は3篇送りました。ひとつは小説、あとふたつは気の向くままに書いた短文です。今はもうひとつ短文を書こうと思っていますが、そういったものを書き終わったら、短いのは書かない、長いのを書くつもり<sup>18)</sup>。

今日は14日、あなたも仕事を始めて何日か経っているでしょうね。

卵、言うことを聞いてくれて嬉しいです<sup>19)</sup>。

あなたは私が日にちをごまかしていると思うの？〔当初滞在予定の〕1年のうち、もう1ヶ月が過ぎました。

私もあなたをうらやむ必要はないわ。来年は私も青島へ行ってのんびりするのだから。あなたを日本の島へ遣わしましょう——

瑩 8月14日

#### 異国

夜：窓の外の木のざわめき、

耳を澄ませばふるさとの畑で震えるコウリヤンのよう、

でも、これは違う。

ここは異国、

カタカタという下駄の音は時に海の水のよう。

昼：この真っ青な空、

ふるさとの6月の広々とした原野のよう、

でも、これは違う、

ここは異国、

異国の蝉は鳴き声も少しうるさい気がする。

## 第五信（1936年8月17日）

均：

今日やっと初めて、ひとりで遠出をしました。実際には2～3kmですが、それでもいい。行ったのは神保町です。そこは本屋がとて多くて、とても賑やかですが、ひとりで歩いても少しも面白くない。何か買いたいと思ったのですが買わずに、またまっすぐ戻って来ました。すごく馴染まない感じがする。通りや風景も全然違う。でも徐家匯と同じような黒い河がありました。ぼろぼろの船が浮いていて、船には女性や子供もいました。皆ぼろぼろの服を着ていました。それに黒い水の臭いも同じ。こんな河はパリにもきっとあるのでしょうか<sup>20)</sup>。

あなたの風邪、何日も続くなら医者に診せなさい。アスピリンを飲みなさい。飲んだらよくなるから。

ちゃんと言っておきたいことがあります。読んだら必ず返事に読んだと書いてください。先ずはじめに柔らかい枕を買うこと。この手紙を読んだらすぐ買いに行つて。硬い枕は脳の神経に良くありません。あなたが買わないなら、手紙に書いてください。こっちでふたつ買って送ります。値段も高くないし、とても柔らかい。次に掛け布団にするふわっとした毛布<sup>21)</sup>を買うこと。私が持って来たようなもので、これよりも厚くないもの。買うのが面倒なら、手紙で教えて。これも送りますから。それから、夜ものを食べないことを忘れないで。それだけ。これがこの手紙の大事なこと全部です<sup>22)</sup>。

カメラも今はあなたの役に立つわ。また写真を送ってください<sup>23)</sup>。私は少し寂しいけれど、でも大丈夫。少したくさん書いたし、書き足しもしました<sup>24)</sup>。

昔の場所に行ってみるのはいいわね。それにすばらしい海もあるし。きっともう何度も海水浴に行ったでしょうね。でも服を脱ぐ部屋がないんじゃない？

あなたが手紙でそこをどれほど素晴らしいと言ったって、私が行くとは限らないわ。私の原稿料も十分だし。心配？冗談よ。冗談のふりかもしれないけれど。

ついでに私が読んだことのない本1～2冊送ってください。本当に読む本がなくて。寂しいとますます本が読みたくなる。朝から晩まで話をしないし、その上朝から晩まで何も読まないなんて残酷です。昔旅館にひとりでいた時みたい<sup>25)</sup>。でもお金はある。お金があっても食事をするだけでほかに面白いものは買えない。

お元気で。

蕭 8月17日

## 第六信（1936年8月22日）

軍：

今はあなたの言うのとは違う、たばこも吸わないことにしているし、部屋も片付いています。でも今日はたばこを半分吸ってしまいました。また雨です。あなたはまた手紙をくれないし、それに華は帰ってしまうし<sup>26)</sup>！それにここ何日か、一日中熱っぽい。肺病じゃないかしら。でも自分では絶対に違うと思っています。でもそれならどうして熱が出るの？節々がだるい。そもそもここに来てすぐは、夜になると気分が悪くなったのです。口が渴いてお腹が張る……近頃ようやく熱と関係があることがわかりました。明日はたぶん華と一緒に彼女の友達の所に行きます。

友達は医学生なので、彼女に頼んで医者所に連れて行って検査して貰おうと言うのです。安いので、2円あればいいらしい。そうでなければ、華はあと何日かで帰ってしまうし、ひとりで医者に行くなんて無理だし、華だって無理。医学上の言葉は彼女だって話せない。たぶんあなたはまだ知らないだろうけれど、黄[源]のお父さんの病気が重く、経済的にも大変なので、彼女は帰らなければならないのです。たぶん27日に出発します。

彼女が帰ってしまったら、何てこと、もう知り合いはいなくなってしまう。彼女と一緒に住んでいる女性はいい人だけれど、お父さんが来てからふたりとも病気になってしまって、遠くの友達の家に行ってしまいました。

もし気持ちと体が少しよくなったら、絶対仕事をします。だって仕事以外すべきことは何もないのだから<sup>27)</sup>。でも今日はとてもだめ、暑気当たりみたい、だるくて、頭痛がして、がまんできない。

ここまでにします。心臓がどきどきしているし、体中の血がぐるぐる回っている。お元気で。

吟 8月22日夜 雨

それから唐詩を1冊買って送ってください<sup>28)</sup>。

#### 第七信（1936年8月22日）

均：

私は大家さんの子供と仲良くなりました。とてもかわいいの。色黒で、きれいな大きい目をしている。まだ5歳ぐらしかしら、でも私に字を教えてくれるの。

ここの蚊はとても大きい、これまで見たこともないくらい。

あの時プールでつけた手の傷はまだよくなりません。少し腫れていて、触ると痛みます。今私は日に2食です。朝ご飯は10銭、晩御飯は20銭か15銭<sup>29)</sup>、お昼はパンかビスケットを食べます。これからはもう少し食欲が出るかもしれないけれど、ひとりでは食べたいとも思わないし、遊びたいとも思わない。お金を使おうとも思わない。ねえ、ここではどの公園にもまだ行っていないのよ。銀座はたぶん華やかな所なのだろうけれど、まだ行っていない。そのうちにね、先で日本語がうまくなればあちこち行ってみるわ。

あなたは私に楽しく遊んでいいよ、と言ったけど、あなたがいる限り私はできないわ。私にできるのは仕事、睡眠、食事、それだけ。私は少しでもたくさん仕事がしたいの。でもよくないとも思ってる。これは正常な生活じゃないから。追放されてるみたいだし、隠居したみたい。そうじゃない？でももし私のこんな生活をほかの人がしてみたら、天国じゃないかしら。本当のところは私にとっても天国とほとんど同じ。

あなたは近頃どうですか？手紙はほとんど来ないから。海はあの時みたいに青いのかしら。澄んでいるのかしら。波は大きい？労山もすばらしい？<sup>30)</sup>聞きたいことはたくさんあります。

でも6日付の手紙、届いてすぐ返事を書いたのに、どうしてまだ届かないのかしら。その文章はまだ書いてないのに、手紙はこんなにたくさん書いている。でもあなたは、青島に行ってすぐの時にくれた手紙のほか、16日に1通くれたきりで、それからは全然。今日はもう26日なのに。私はここに来て1ヶ月と6日経ったのよ。

今日はやめて、明日何か思いついたらまた書きます。

今日はあなたが労山から戻ったあとの2通を一緒に受け取りました。あの小さな写真機でこんなに良く撮れるなんて思いもしなかった<sup>31)</sup>！とても奇麗に撮れている。全部はつきり映っている。私も労山を歩いたみたい。

ねえ、労山に私が一緒にないなんて、考えられる？

あのひとりで撮った大きな写真、私は感心しないわ。あんな大きな目、これまで見たこともない<sup>32)</sup>。

2枚の紅葉はもう乾きました。私が初めてあなたと出会った頃、あなたも2枚の葉っぱを私にくれたわね。でもあれが何の葉っぱだったかは忘れてしまった。

孟 [十還] が手紙を寄越し、2冊の『作家』を送ってきました<sup>33)</sup>。彼のこんな風に言葉や言い回しを変えたりするのはやっぱり悪い癖よね。

「瓶は大きくて、朱色で、置いてみると、とても素敵だ、ただ……」。この「ただ」はどんな意味なのかしら。私には分かりません。

ビーチボールは空気が抜けてしまったのね、ほんとに可笑しい、きっとあなたがまた潰してしまったのでしょう。

まだ可笑しいことがあるわ。どうしてあなたは考えを変えたの？何を根拠に？それなら言うけど、私が創作を一番に考えているのは、最初からその通りよ。

私も太っても痩せてもいません。入浴場所で毎日計っています。

そう、今日はちょうど27日だから、1ヶ月と7日ね。

西瓜をそんなにたくさん食べては駄目、一気に食べるのはよくありません。少し時間をおいてから食べること。

あなたは私に飛んで帰って来いと言うけれど、私のことを思ってくれたの？私はあなたのことなんか考えていないわよ、日本に10年だって住むわ<sup>34)</sup>。

私は淑奇に手紙を書いていません。住所を忘れてしまったの。「商鋪街10号」だったかしら、それとも「15号」だったかしら。それとも「内15号」？あなたに聞きたいと思っていたところです。次の手紙で教えてください<sup>35)</sup>。

それでは周が帰ったらまた手紙を書きます。周にことづけなくて良いかしら？

そもそも25日より前に短編が書き上がるはずだったのですが、まだ足りない。今三万字の短編を書き始めようとしているところです。『作家』10月号に送ります<sup>36)</sup>。終わったら童話を書きます。こんな風に童話ばかり書いていると、ほかのは書けなくなって、ちょっと体裁が悪いわ<sup>37)</sup>。

東亜 [学校] はまだ始まっていません。いくつかの単語は話せるけど、文になるとだめ。大家さんはいい人です、中国の大家さんより良いと言えます<sup>38)</sup>。

待っていなさい！何月か、何日か分からないけれど、本当に飛んで帰るわ。そうなったら、あなたに呼び戻されたと言うから。

ここまでにします。

吟 8月27日夜7時

元気でね。

あなたがくれた手紙の封筒の小さな花、とても素敵。はじめ手ではがそうとしたのよ。  
東京麹町区富士見町、二丁目九一五中村方<sup>39)</sup>

第八信（1936年8月30日）

均：

20日余り息が苦しかったのですが、昨夜だけは大丈夫でした。だから今日はとても嬉しくて、まるまる10枚原稿を書くつもりです。

そのほかの報告はありません。

蚊に噛まれて足に大きな跡ができました。

瑩 8月30日夜

第九信（1936年8月31日）<sup>40)</sup>

均：

一大事！記録更新です。今もう10枚を超えています。すごく嬉しい。でもこの手紙を書いている今、外は雨風がひどく、電気が何度も暗くなったり明るくなったりしています。可笑しい幻想が浮かぶの、地震が来たらどうしよう、って。三万字のはもう26枚になりました<sup>41)</sup>。地震で駄目になっちゃうんじゃないかしら！本当に幼稚。でも本当のところ、気持ちはずっと落ち着かない。多分「あなた」が側にいないからね。

電気がまた暗くなりました。雷が何かを引き裂いているみたい！……たった今新しい題材がひらめいたわ。

昔は雷なんて何も感じなかったのに、今は違います。雷が鳴るたびに私の心が波立ちます。

心が繊細すぎる人は、またきつとちっぽけなのよね。だから私は自分を尊敬できない。私は大きくて広い人を尊敬する！<sup>42)</sup>……

私の時計はもう10時15分。あなたのところでも雨風がひどくない？

電気がまた暗くなりました。

お休みなさいを言って筆を置くしかありません。

吟 31日夜。8月

第十信（1936年9月2日）

均：

こんな酷い腹痛、3年前にもありましたが、今日またそれが起こりました。朝の10時から2時まで。4時間でしたが、体中が震えました。洛定片はだめです。4つ飲んでも効かない<sup>43)</sup>。

原稿は40枚になりましたが、今はやめておくしかありません。もしこうならなかったら、今日は50枚になっていました。今は多分これに集中しているからでしょう、筆も進むし、面白い。

毎日12時か1時に寝ています。なかなか見込みあり、です。小さなアザラシはもう小さなアザ

ラシではなくなったわ<sup>44</sup>。とても充実していて、早く寝ます。寝付けないとかえってあれこれ考えてもっとよくない。今でも早起きはもちろんです。お腹はまだ痛いけれど、この隙にあなたに手紙を書きます。ベラモンを飲めばもう少し効くかも知れないけれど、今は買って来てくれる人がいません<sup>45</sup>。

この原稿は長いから、正書すればきっと誤字がたくさんあるでしょう。今回は特に気をつけなければ。

ここまでにします。あなたに手紙を書きすぎるから。

元気でね。

吟 9月2日

お腹は良くなりました。2日5時。

#### 第十一信（1936年9月4日）

三郎：

51枚で終わりにします。自分でもよく書けたと思えるので、嬉しいですよ<sup>46</sup>。孟が手紙で、「『作家』と疎遠にならないでくれ」と言ってきましたが、今度は多分そう言わないでしょう<sup>47</sup>。

あなたはどうして手紙をくれないの？私が5通書く内にあなたはようやく1通<sup>48</sup>。

腹痛は良くなりました。熱はまだありますが。

自分でも満足です。1ヶ月半の間に三万字書いたのだから。

補習学校はまだ始まりません<sup>49</sup>。こちらは何日かまた暑くなりました。が、今日は涼しいです。学校が始まったら行かなくてはならないから、生活は単調になって、精神的にはあまり良くないでしょう。

昨日出かけた時、中国服を着た中国人の女性を見かけました。街で車を止め、運転手に手に持った紙切れを見せたのですが、運転手は彼女を乗せませんでした。街の人は皆彼女を見て笑っていました。彼女もきっと私のような新しく飛んで来た鳥なのでしょう。

今まで、私自身はどんな乗り物にも乗らず、歩くと言っても神保町に行くくらいです。

アイスクリームはほんの少しだけ食べました。食べたくないから。西瓜は食べますが、あなたほどたくさんは食べないし、やっぱり食べたくない。映画は合計3回見ました。公園はどこにも行っていません。1日24時間、3回ご飯を食べて、それ以外眼が覚めると椅子に座っています。でも楽しいです。 御元気で。

吟 9.4

#### 第十二信（1936年9月6日）

均：

あなたはいつもそんな胸がキュンとなるような呼び方で私を呼ぶのね。

でも私は絶対に、帰りません<sup>50</sup>。来たからには。それに来た時には1年いるつもりだったし、

今もそうしようと思っています。学校が始まったら通います<sup>51</sup>。

でも身体の調子はあまり良くありません。先では治療するかも。この間の腹痛は、今もあまり良くなっていません。あなたはとても元気ね、何て黒いの！まるでスポーツ選手みたい。そうでなければ子馬だわ<sup>52</sup>！あなたが元気なのが一番嬉しいです。

黎〔烈文〕の刊行物はどう<sup>53</sup>？誰も教えてくれません。

黄は『十年』にも書いてくれと手紙を寄越しました。あなたはOKしたんですって？でもそれってどんなもの<sup>54</sup>？

上海のあの3人の子どもたちはどんなですか<sup>55</sup>？

あなたは王関石とまだ食事をしていないの？私は王関石のことを思うと、あなたが彼を殴ったあの石のことを思い出すわ<sup>56</sup>！袁泰には逢いましたか？それからあの張は<sup>57</sup>？

唐詩は私が読みたいの。早く送って下さい<sup>58</sup>！精神的な食料がすごく欲しい！だから病気にもなるのね！

ここまでにします！来年逢いましょう！

瑩 9月6日

### 第十三信（1936年9月9日）

三郎：

原稿はもう渡しました。この2日間、何もしていません。そこでハンカチを1枚作りました。あなたに送ります！

『八〔八月的郷村〕』はもう五版なのに、「印花」はないのね。売れ行きはいいってことね<sup>59</sup>。今あなたは何を書いているの？

労山も行きたくない、冗談を言っただけです。あなたを脅かそうと思って。私の足が細かろうがどうだろうが、罵ることはないでしょう<sup>60</sup>！

〔上海で〕別れる時、書かないでと言ったのは、くどくどしい手紙のことよ。

黄が本を送ったと言って来たけれど、3日経ってもまだ着きません。『江上』も、『商市街』も、『訳文』なんかもあると言うのだけれど<sup>61</sup>。本は読みたくて仕方がない。1日24時間、食事の仕度をするでもなく、話をするでもなく、仕事を休むと1日がとても長い。電柱に寄りかかって読むのはどんな本<sup>62</sup>？普通のでいいから早く送って下さい。書留にしなくて良いわ、お金がかかるから。減多になくはしないから。唐詩も早く送って<sup>63</sup>。読んだって大丈夫でしょう？私がどんなに厳格な人間でも、毎月毎日四六時中厳格ではいられないでしょう？特に詩は、読んでみると歌みたいで、気持ちも楽しくなるのよ。そうでなかったら、これは頭が空っぽの人の生活みたいじゃない？書くのはもちろん私。でも人としてずっと書き続けること、始終考えて書いたりすることは、私は無理だと思う。真面目にやらなきゃならないとは思うけど、楽しみだって少しは必要でしょ。そうでなかったら尼寺に入ったみたい。だからあれこれ言ったけど、唐詩をやっぱり早く送って下さい。

胃の調子はまだ悪いです。また少しひどくなった気がします。食べ物にはとても気をつけています。でもまだ良くなりません。毎日、一日に何度も痛くなります。でも帰るかって言えば、私は

帰らないわ。来るのだってたいへんだし。日本語を勉強して本が読めるようになったら帰ります。ここには本がとてたくさんある。1年住めれば、真面目にやらなくても大丈夫。黄が手紙で、あなたが10月末に上海に戻ると言って来ました。それじゃあ北平には行かないことにしたの？

御元気で。

瑩 9月9日

東亜補習学校は、昨日もう一度見に行って来ました。でも見てもわからなかった。学生募集の広告、結局どんな学生を募集しているのか分かりませんでした。明日また行ってみます。

#### 第十四信（1936年9月10日）

三郎：

私もあなたに絵を描いてあげます。でもこれは部屋の半分です。私の部屋は6畳です。あなたあの絵、特にコメントはありません。ただあのふたつの小さな西瓜だけれど、とても可愛いわ。あなたはどのようにそれを描いたのかしら。もし私がそばにいたらそれを食べてしまったかもしれないわね。

バカばかり言って。何を修練するの？ちゃんと修練することなんか何もないわ。1年経って初めて本が読めるのよ。

今朝1通出しました。でも午後にならないうちに本が来たわ、手紙も。唐詩は2首読んだけれどあまりピンと来なかった。あとは夜読みます。

もし日本に1年住めても、きっと何も進歩はしない、死んだ水のように1年を過ごすでしょう。多分1年、あるいは数ヶ月にならないうちにここからいなくなるわ<sup>64</sup>。

日本語はあまり学びたくありません。ロシア語を学びたい<sup>65</sup>。でも日本語は学ばなくてはならないものです。

以上は昨日書きました。

今日学費を払い、本を買いました。14日に授業に出ます。12時40分から4時間、長いと言えばかなり長い。教科書も5、6冊あります<sup>66</sup>。みんな中国人です。この学校は中国人のために作られているのです。珂が来たかどうかは分かりません<sup>67</sup>。

3ヶ月、本まで入れて21、2円です<sup>68</sup>。本当は5日に始まったのですが、私が間違えたのです。これから奇〔淑奇〕たち<sup>69</sup>に手紙を書こうと思っているので、ここまでにします。

御元気で。

吟 9月10日

#### 第十五信（1936年9月12日）

均：

今朝刑事が来て、本当に頭に来たわ。喉は痛いし、めんどくさいったらありゃしない<sup>70</sup>。だからいつまでここにいるかは分かりません。気持ち的に本当に不愉快。どうしても私の部屋に上が

るって、グダグダ言うのよ。朝、そもそもまだ寝ていたから、大家さんが、話すなら下で話したら、と言ってくれたのだけれど、承知しない。部屋まで行かなきゃ駄目だって。これからも来るかしら。もしまた来たら私は出て行くわ。

華と住んでいた友達は市外に引っ越すんですって。これからは誰も知り合いはいなくなるわ。でもそんなのは大したことないと思う。私は長いこと書いていないけれど、またこのせいで落ち着かなくなってしまった。ここがいいかげんもううんざりなのに、更にうんざりが増しました。

全く、この年ときたら……

私の一番の目的は創作です。妨害は——だめです。

私、本当は嬉しいはずなの。明後日授業に出るのだから。でも今日のこの感じ、本当に気分が悪くなった。しばらく我慢して、それから考えるわ！でも青島には行きません。私を待たなくていいわ。青島を離れたければどうぞ御自由に。

あなたが送ってくれた本、全部読みました。

本当に、馬鹿野郎だわ。

御元気で。

吟 9月12日

均：

今書いた手紙だけど、言うのを忘れていました。奇に手紙で伝えて。私に手紙は寄越さないで、って。あなたが転送してください。

あなたの手紙も、封筒に住所は書かないで。

#### 第十六信（1936年9月21日）

均：

あなたの写真、こそ泥みたい<sup>71</sup>。あなたの手紙はまた2通一緒に届きました。（7日、9日の2通です）

あなたは何かにつけて私を馬鹿だって言うのね<sup>72</sup>。いいわ、これでも参ったと言わないかしら？ 10日で57枚書いたのよ。

北には行かないことにしたなら、それでもいいわ。ひとりではそもそもそれほど面白くはないわね。牛乳は飲んでいません。力弗肝<sup>73</sup>も買ってない。外国の名前を知らないし、西洋の薬を売っている薬屋も分からないから。ここでは西洋の商品に対する排斥がひどいです。簡単には買えません。お腹の痛み止め注射も駄目、一言も話せないから。それにここの医者とはとても高いの<sup>74</sup>。次の腹痛のためにベラモン<sup>75</sup>を一瓶買おうと思うんだけど、でもどこで買えるか分からない。聞こうと思って聞ける人がいない。

秋の服はまだ買っていません。ここの気候ではまだしばらくいらなと思います。

こっちに来る前、あなたに革のコートを買ってあげると言ったけど、上海に帰ったら自分で買ってください。40元くらいのを。私の少しばかりの収入は送ってもらわなくていい、直接あなたが取りに行って<sup>76</sup>。

気持ちがまたざわざわして、寝ても駄目、あれこれ考えてしまう。ほんとに厭だわ、また面倒

なことが起こったら、もう耐えられない。

私が蕭乾<sup>77)</sup>に宛てた文章も、黄と一緒に黎に渡してしまったのね<sup>78)</sup>。あとで蕭に会ったら謝っておいて下さい。

封筒だけど、続けて書いて大丈夫です。句読点はいりません<sup>79)</sup>。

栄子 9月14日

第十七信 (1936年9月17日)<sup>80)</sup>

均：

この頃私の身体はとても不健康です。多分あなたも分かると思うけど、そのうち帰るかも知れません。だからしばらく手紙は出さないで。

大家さんは言葉は通じないけれど、縁を切ってしまうのは惜しい。時々手紙に書くわよね。私はまだここがとても好きです。もしできるなら、まだここに1年いたい。

手紙で無事を知らせてくれるのも駄目と言うわけではありません。

小鷺<sup>81)</sup> 9月17日

第十八信 (1936年9月19日)

均：

この前の手紙、分からなかったのじゃないかしら。「健康」の二文字<sup>82)</sup>は本来の意味で解釈しないでね。

学校は毎日行っています。今私は牛乳を飲みながら手紙を書いています。あなたの13日と14日の手紙、一緒に来ました。今度の手紙はとても早かったわ、4、5日しかかかっていない。

私の大家さんはいい人です。彼女はよく私にプレゼントをくれます。例えば飴とか落花生、おせんべい、リンゴ、葡萄など。それから鉢植え。これは窓辺に置きました。あなたにあげたしおり、御礼も言わないのね、最低！これからは何もあげないわ<sup>83)</sup>。

言っておくけど、私の期限は1ヶ月、童話が終わったらおしまい。多分10月15日より前ね。

手紙には日常のことを書いて。医者には見せに行けなかった。あとで華に聞けばこっちの様子が分かるわ<sup>84)</sup>。

上海からはしょっちゅう刊行物が送られてくるけど、もういりません。この1ヶ月、何も余計なことはせずに、ただ童話に全力投球しています。

押し花は箱にしまいました<sup>85)</sup>。

御元気で。

小鷺 9月19日

## 第十九信（1936年9月21日）

均：

昨日も今日も雨です。学校から帰る途中、こぬか雨に遭いました。だからそれほど濡れませんでした。今私は雨靴を持っています。でも男物みたい。だから外に出るとたくさんの人が笑うの。ここはこんな風に保守的なところですよ。彼女たちと違う服を着ていたらきっと皆に笑われる。日本の女性は洋服を着て、ごてごてしています。でも同じようにごてごてしなければならぬ。もしちょっとでもすっきりしていたら、あるいは彼女たちが見たことのない格好をしていたら、きっと笑われるでしょう。

授業は本当にとてもたくさん。午後が丸々日本語に使われてしまいます<sup>86</sup>。今日は三時間目になった時、胃が痛み出して我慢できませんでした。

ここ数日はとても涼しいので、薄いセーター（2円50銭）を1枚買いました。これからもっと寒くなったら、厚いセーターを着ます。多分服は来月半ばくらいまで大丈夫だと思います。

私は夜がとても好き。この夜はとても静かです。毎晩何度か眼が覚めるのですが、いつもすぐにまた眠ってしまいます。本当に静かで、本当に快適です。朝もまた素敵。太陽の光が窓にさす前に起きて、考えごとをしたり、何かつまんだりします。この2～3日、気持ちは落ち着いてきました。誰でも、どんな運命でも、脅かされたって気にしない。

孟が手紙で、帰って来いと言ってきたのよ！そっちにいてどんな意味があるんだ、って。

私はひとりで何度も高架の電車に乗りました。とても速いし、トンネルにも入るの、とても楽しい<sup>87</sup>。楽しいんじゃないわ、面白いの。あなたがこう言ったことがあったわね。女はこれも楽しい、あれも楽しいって言うって。この前迷子になりました。前の駅で下りてしまったの。駅を出て見て、違うことに気づいたのだけれど、どこに行ったらいいんだろう。自分でも分からなかったの、とにかく行こう、って。自分の住所は覚えているから。可笑しかったのは、まだ華がいた頃、空に浮かんでいる大きな気球<sup>88</sup>が何とか商店の広告だと教えてくれたことがある。その店は学校に近かったから、その気球を見つけてそっちの方に向かいました。そしたら結局迷子にはならなかったわ。

虹〔羅烽〕からは手紙が来ません<sup>89</sup>。彼に手紙は寄越さないでって言ってね、ほかの人にも。

これは青島にいるあなたに出す最後の手紙ね。次の手紙は上海ね<sup>90</sup>。船には果物を少し買って持って行ってね。卵は食べては駄目、あれは消化が悪いから。ビスケットは持っていてもいいわ。

御元気で。

小鷺 9月21日

## 第二十信（1936年9月23日）

均：

昨日の午後、あなたの手紙2通受け取りました。何度も読んだわ。本当はこの前の手紙、もう青島には出さないと言っただけけれど、また書かすにはいられなくなってしまいました！手紙を受け取れば返事を書きたいと思ってしまう。用事があってもなくても。

今日はお休みです。日本の何かのお祭りの日。  
「第三代」はもうじき第一部が完成するの！本当に大したものだわ！多分この手紙を書いている時にはもう完成しているわね<sup>91)</sup>。  
腕白坊主<sup>92)</sup>、あれがあなたのズボンの残りの絹の部分だって、分かる<sup>93)</sup>？  
悪党<sup>94)</sup>、外国の子どもと喧嘩するなんて！  
果物はやっぱりあまり食べません。嫌いなもの。  
雨が降ったので私のことを考えたのね。私も少しはあなたのことを考えているわ！こちらも2、3日晴れがありません。  
ここまでにします。

瑩 9月22日

### 第二十一信（1936年10月13日）

均：

私は帰らないことにしました。あちこち引越すのは面倒臭い。いろいろ考えたけど、やっぱりここにいることにしました！もし本当に仕方がないならどうしようもありません。でも今はとても穏やかです。

この1ヶ月、また空しく過ぎました。生活は快適とは言えません。

奇たちは元気？小奇はもう小明みたいに可愛くなったかしら<sup>95)</sup>？あつという間に3年、彼らに会っていないわ。奇は私のことをあれこれ聞くでしょうね。ロシア語の先生がどうしているか、聞かなかった<sup>96)</sup>？彼らはこれからどこに住むつもりかしら。経済的にはどうなの？

寒くなりました。一日中秋雨が降っています。お金ももうなくなりそう。少し送ってください！まだ手許には30円ちょっとあります。お金が届かないと外套が買えません。月末には欲しいわ。

あなたは旅行したから元気なのでしょう？

私はもう孟に手紙を書きました。もしあなたがいなかったら彼から送って欲しいと。

私は元気です。映画で北四川路を見ました。スコット路も。ちょっとの間、私は落ち着かない気持ちになりました。年老いて、病気で、荒波にもまれている人のことを思って<sup>97)</sup>。

御元気で。

吟 10月13日

### 第二十二信（1936年10月17日）

河清〔黄源〕兄：

老三〔蕭軍〕はまだ戻りませんか<sup>98)</sup>？

私は帰らないことにしました。ここにずっといます。

毎日日本語に6、7時間を費やしています。こうやって勉強を続けるのは、本当にたいへんです。1年経てば本当に何とかなるのでしょうけれど、私は真面目ではありません。もし真面目にやったら、時間は殆ど無くなってしまいます。でも『十年』<sup>99)</sup>の文章はこのせいで書いていない

のではありません。

華姐〔許粵華〕は忙殺されているでしょうね。

『訳文』<sup>100)</sup> はやっぱり送って下さい。よろしくお願いします。  
御元気で。

吟 10月17日

第二十三信（1936年10月20日）

均：

こちらは平穏です。絶対に帰りません。胃はもうほとんど良くなりましたし、頭痛の回数も減りました。意外なことにもう起こらないような気がするのです。だって私の生活はとても単純で、毎日の出入りも大してないし。たぶん何日か「つけ」られたけれど、それからはつけられなくなったから<sup>101)</sup>。そもそもここに来る前にもこんな風になるとは思っていたのだし、今は相変わらず最初の考えの通り、来年までいるつもりです。

今手許のお金は20円を切っています。浪費したつもりはないけれど、あまり使っていないとも言えません。月末に送金してください。外国にいて帰国の旅費が手許にないのは心許ない。それに知り合いもないし。

今日は1時間休みました。家に帰ったら畳の上に封筒が置いてありました。初め、珂からのかと思ったの。あなたの字が本当に珂によく似ているから。この文、分かりました。（でもあなたの言い方、「一緒に来たのは之明〔黄田〕で、奇は今天津にいる。暫くは来ない」と言うのはよく分かりません。もとの言葉を書いておきます。見てください。）（以上の括弧内の文は、書いた後消してあり、その上に「この文、分かりました」と書き加えてある。恐らく最初は分からなかったのが、あとで分かって、消したのだろう。——蕭軍注）

6円で洋服1組（スカートと上衣）を買いました、毛糸の。それからゴザを5円で買いました。私の部屋はとても片付いています。お客さんが来るのを待っているみたい。ゴザは畳んでソファーにしました。それから小さな丸テーブル。テーブルの上には赤い色のお酒が1本立っています<sup>102)</sup>。酒瓶の下には一対の金の杯。多分ひとつ所に長く居ると、少し開放的になるのでしょいうね。気持ちが身の周りのしつらえに向くようになってきましたから。部屋に小さな絵を掛けました。何てことのない、普通のことですが、こんな小さなことにこんなに熱心になるものかしら。自分で感じてみなければ分からないわ。こちらに来たばかりのころ、半月ぐらい、こんな気持ちにはならなかったもの。

日本語の授業はとても多いです。多分全部覚えておくには丸1日なければだめだと思います。私にはできません。それに私の時間は足りない。いつもじっくり考えてしまうから。

新聞でL〔魯迅〕がここに来るとありましたが……<sup>103)</sup>？

お風呂に行つて来ますので、ここまでね。

明〔黄田=黄之明か〕、ここであなたと握手するわ。

吟 10月20日

第二十四信（1936年10月21日）

均：

昨日出した手紙だけど、今ちょっと時間ができたのでまた少し書こうと思います。あなたたちが見つけた部屋はどこにあるの？どのくらい大きい？どんな風？こういったことは今私とは関係ないけれど、考えずにいられません。本当に間が悪いわ。そうでなかったら私たちは明たちと一緒に暮らせたのに。

明も、新しい生活についての希望を書いて寄越してくれればいいのに。私は何も知らないのだから。小奇はどんな？人に好かれる子どもになった？均、あなたは何でも見られるけれど、私は何も見られないのよ。

均、あなたはいつか私が借金をすると思っていましたでしょう。昨日縁日の屋台<sup>104)</sup>で6銭借金をしました。これを書き終わったら返しに行きます。

何日か前、画集を1冊買いました。Lに送ろうと思って。でも今それはここに置いて自分で見るしかありません<sup>105)</sup>。私はこの画集が大好き。そうでなかったらあなたに送るところだけれど、あなたはきっと大して喜ばないでしょう。だからその考えはなしにしました。

3日間、昼も夜も絶え間なく小雨が降りましたが、今日は晴れました。気持ちもちょっと爽やかです。

小さなソファは私にとってはひとりのお客さんです。私の生活においてはまさに重大なことなのです。それは私の結構な孤独感を減らしてくれました。いつも壁の端っこで私と一緒にいてくれます。

奇はいつ南に来るの？ 御元気で。

吟 10月21日

「海外の悲しみ」（1936年10月24日）<sup>106)</sup>

軍：

周先生〔魯迅〕の死を、21日の新聞で知りました。何となく気づいていたのですが、自分が正しいとは信じられなかった。私はあのたったひとりの知り合いの所に飛んで行ったのですが、彼女は「あなたは日本語が分からないから、見間違えたんでしょ」と言うのです。私は心底見間違えであって欲しいと思いました。だから気持ちを落ち着けて帰って来たのです。出かける時は涙を流していたのに。

昨夜、私は泣かないではいられませんでした。中国語の新聞にはっきりと先生の写真が載っていたのを見てしまったのです<sup>107)</sup>。しかもそれは何と悲しい瞬間だったでしょう。私の泣き声があなた方の泣き声と一緒になれないのが残念でなりません。

今先生はもう私たちのもとを離れて5日になります。今先生はどこで眠っておられるのでしょうか<sup>108)</sup>。3ヶ月前、先生にお別れを言った時、先生は籐椅子に腰掛けてこうおっしゃいました。「波止場に着くたびに、検査官が乗って来ますが、大丈夫です、中国人は専ら中国人を脅すのですから。ボーイはこう言うはずですが、検査官がいらっしやいましたあ！いらっしやいましたあ！……」

あなたの手紙を待っています。

許〔広平〕先生<sup>109</sup>の悲しみが心配です。何とかして、よくお慰めしてください。一番良いのは静かにしておかないことです。始終お訪ねしてください。この一番辛い、悲しい最初の時が過ぎれば、それからは大抵最初よりは簡単に落ち着いてくるものです。それからあの子<sup>110</sup>、私は本当に想像もできません。ひと跳びに帰りたい。こうやって想像している時間が、完全に孤独の中にいる人間にとってどんなに恐ろしいことか！

最後に、私に替わって花輪か何かを送って下さい。

許先生に伝えて。子どもの前ではあまり泣かないように、と。

紅 10月24日

- 1) 日華学会は、1918（大正7）年5月、中国人留学生の支援を目的とし、小松原英太郎（元文部大臣、枢密顧問官）を会長として設立された。その後、松本亀次郎が立ち上げた「日華同人共立東亜高等予備学校」を譲り受け、1925（大正14）年、「東亜高等予備学校（後に東亜学校）」を開校する。校舎は東京市神田区仲猿楽町五及び六番地にあった。蕭紅が在籍した翌年の1937年当時、東亜学校の校長は細川護立、教員の中に東亜同文書院出身で中国文学研究者の魚返善雄（1910～66）の名前が見える。当時の学則によれば、修業年限は4年（正科1年、高等科3年）で、正科の学科目は修身と日本語（随時英語、数学、物理、化学、博物、地理、歴史などを付設）、高等科学科目は修身、日本語、英語、歴史、地理、哲学概説、心理、論理、法制経済、数学、自然科学とある。正科は開始期（4月、9月、1月）により1年を3期に分けている（日華学会『日華学会二十年史』1939.5）。
- 2) 原題は「在東京」。平石訳。帰国後の1937年8月、恐らく上海で書かれ、その後避難先の武漢で発行された雑誌『七月』1巻1期（1937.10.16）に発表された。
- 3) 蕭紅が日本に留学するようになったいきさつに関しては拙著『蕭紅研究——その生涯と作品世界』（2008.2、汲古書院）を参照されたい。
- 4) このほかに、蕭紅が帰国後、北京から蕭軍に宛てた8通が収録されている。
- 5) この手紙は、上海から東京に向かう船の上で書かれている。蕭軍は、出発は7月16日か17日であったらうと言っている（1：『注釈録』第一信に対する注釈を指す。以下同じ）。また王徳芬「蕭軍簡歴年表」（『蕭軍紀念集』1990.10、春風文芸出版社）は7月15日に魯迅と許広平が自宅で饞別の宴を開き、翌日は黄源（注7参照）が送別会を主催した、とする。
- 6) ほかに手紙では「均」、「軍」、「三郎」などとあり、「君」はこの一通だけである。「均」、「軍」、「君」は中国語ではいずれも「jun」と読まれる。
- 7) 蕭紅には満州国留学生として既に東京に来ていた弟、張秀珂に会うという希望があった。また黄源の妻（許粵華）も東京に留学中であった。

黄源（1906～2003）、筆名は河清、澄清など。浙江省海塩出身。上海に出て五四新文学を知り、茅盾に大きな影響を受ける。1928年初、友人の資金援助を受けて日本に留学、翌年帰国し、同郷の許粵華と結婚、翻訳に従事する。『文学』や『訳文』（注61参照）の編輯に携わった後、抗日戦争期には筆を捨てて新四軍に参加し、許と別れる（黄源「我是怎么走向文学道路的」（1995.5.29）：上海魯迅記念館編『黄源文集』：2005.5、上海文芸出版社、及び『黄源文集』所載「黄源簡介」、張蓉・陳毛英「難忘許粵華女士」：『魯迅研究月刊』2009年第11期所収）。

許粵華（1912～2011）、筆名は雨田。浙江省海塩出身。黄源と結婚後、1935年夏に日本に留学。1936年8月27日に帰国し（第六信参照）、上海文化生活出版社に勤めながら翻訳に従事する。秋田雨雀「高爾基的死」（『海燕』1-1、1936.6）、鹿地亘「魯迅的回憶」、内山完造「魯迅先生」（共に『訳文』

2-1、1936.9)などの翻訳がある。黄源と別れた後、黎烈文(注53参照)と再婚し、1946年に共に台湾に渡る。黎烈文の死後、子どもたちを連れてアメリカに渡る(「難忘許粵華女士」)。近年公開された映画『黄金時代』などでは蕭軍との間に不適切な関係があり、それが蕭紅が予定を切上げて帰国した要因となったとされるが、根拠は明らかでない。

『注釈録』によれば、蕭紅に東京行きを勧めたのは黄源である。「彼女の心身の状態が非常に悪かったので、黄源兄が提案し、一時期日本に行くことになった。上海と日本はさほど遠くないし、生活費も上海に比べてさほど高くない。環境も割合静かだから、休養してもいいし、読書三昧でも、創作してもいい。日本の出版事業は比較的発達しているから、日本語ができるようになれば、世界の文学作品を読むのにも都合が良い。黄源兄の夫人、華女史が丁度日本で日本語を学んでいるが、まだ一年にならないのにもう短い文章を翻訳できるようになっている。まして華夫人が向こうにいるのだから、いろいろな面で面倒を見てくれるだろう……」(1)とある。

- 8) 蕭紅の東京までの経路について、筆者は以前、当時の時刻表に基づき次のように類推した。「蕭紅が上海を発ったのは7月17日。18日に長崎に着いたとあることから(第一信)、蕭紅は日本郵船の長崎丸か上海丸で、長崎を経由して神戸に上陸し、そこから鉄道で東京に来たと思われる。上海—長崎間がおよそ1日、長崎—神戸もおよそ1日、鉄道で神戸—東京もおよそ1日を要したから、20日頃には東京に着き、21日に下宿を決める(第二信)ことは可能である」(平石「蕭紅の東京時代」:『アジア遊学』No13、2000.2、勉誠出版)。
- 9) 原文は「席子」。蕭紅が住んだ部屋は6畳の日本間だった。第十四信に蕭紅自身による部屋のスケッチがある。
- 10) 蕭軍は「私は彼女が足りないと言っているものが私であることがよくわかる。もし私たちが一緒にいたら、蝉の声も、下駄の音も、『寂しさ』も……全部存在しないのだ。このことから、『人』が結局すべてを決める要素であることが分かる」と言っている(2)。
- 11) 注13参照。
- 12) 「私はどんな『薬』を飲んでいたのだろう。全く思い出せない。あの頃神経的に何か病んでいたらしい。夜、一度病院に行ったし。あの頃、多分私は大食いだったのだ。だから彼女は私に『少なめにしろ』と言ったのだ」(2)。
- 13) 第二信では「踏踏的奇怪的鞋声」と言っているが、ここでは「木屐」と言っている。
- 14) 蕭軍は上海に来たばかりの時のことを、「人も土地も馴染みがなかった言葉も通じなかったが、まだ我々ふたりは一緒だった。それに魯迅先生がほとんど1日おきに手紙を下さったから、気持ちの上では寂しくなかった」と言っている(3)。

魯迅は1934年10月9日を最初に1936年2月23日まで、蕭軍と蕭紅に宛てて計53通の手紙を書いている。手紙が1936年2月で途絶えているのは、ふたりが魯迅の家の近くの北四川路永樂里に引っ越し、ほぼ毎日のように訪問するようになったからである。蕭紅が東京に行くことになり、ふたりは魯迅の返事を書く煩わしさを避けるために、手紙を書かないことに決めた。魯迅のふたり宛てた手紙については蕭軍『魯迅給蕭軍蕭紅信簡注釈録』(1981.6、黒龍江人民出版社)、また平石「上海における蕭軍・蕭紅の文学活動に関する考察—魯迅の両蕭あて書簡について」(『大正大学研究紀要』第85輯、2000.3)がある。蕭紅と魯迅との関わりについては、「回憶魯迅先生」(平石「蕭紅:魯迅先生の思い出—翻訳と注釈」:『日本女子大学文学部紀要』第64号~第65号、2015.3、2016.3)から覗くことができる。

- 15) 蕭軍は1936年8月から9月30日まで、東北脱出後上海に来るまでおよそ半年ふたりで滞在した青島を再訪し、山東大学の友人の宿舎に泊まり込んで作品を書いたり、海水浴を楽しんだりした。ふたりの東北脱出に関しては平石「蕭軍・蕭紅の東北脱出」(『植民地文化研究』第11号、2012.7)を参照されたい。
- 16) 蕭紅の実弟張秀珂は既に述べたように、満洲国留学生として東亜学校で学んでいた。曹革成『我的

『嬌嬌蕭紅』（2005.1、時代文芸出版社）によれば、蕭紅は東京に着いてすぐ、張秀珂に手紙を出したが、指定した場所に彼が現れなかったため、神田の下宿を訪ね、既に帰国したと聞かされる。しかしそれは偽りで、張秀珂は蕭紅が東京に来ることを知っていたが、特務を恐れ、敢えて連絡しなかったらしい。その年の年末に帰国した張秀珂は、結果的に蕭紅と半年近く、東京の同じ空の下で生活したことになる。しかし張秀珂が東亜学校に通っており、蕭紅も同じ学校にしばらく通ったことを考えると、顔を合わせなかったことがむしろ不思議である。

蕭軍は（13）に、1946、7年頃東北で張秀珂と再会した時のことを書いている。「当時彼は『新四軍』の先遣部隊と一緒に東北に来ていた。部隊では文化教育や日本語の翻訳を担当しており、いろいろなことを話した。その後、哈爾濱の『魯迅文化出版社』の建物で出会った。私は彼の心と顔色に変化があることにはっと気づいた。顔面は蒼白で、短い髭を生やし、ほんやりとして、視点が定まっていない……私は彼に問いかけた。／『病気かい？』／『うん！』彼はひどく落ち着きのない様子だった。／『どこが悪いんだ？』／『……』彼は具体的なことは何も答えなかった。／彼と比較的長く話をした。そして彼が既に休暇を貰って家に戻っており、部隊を退職したい、という考えを持っていることを知った」。蕭軍はまた、張秀珂は、蕭紅と自分の父親張選三が実の父親ではないのではないかと疑っており、それが彼の心をむしばんでいたのだと書いている。

- 17) この手紙は宛先が青島である（注15参照）。蕭軍は8月4日の手紙について、恐らく青島から出した最初の手紙だろうと言い、その手紙ではわざと生活面や環境面の「幸福」を誇張し、「日課表」を送って彼女を「ちょっと怒らせよう」とした、としている（4）。「蕭軍簡歴年表」に見る「日課表」は以下の通りである。「1：朝6時に起床、2：トラックを3周、鉄棒で懸垂などをやり、柔軟体操と剣術の稽古、3：1時間運動した後洗面、一休みして朝食（牛乳1本、ソーダビスケット5枚、卵2つ）、4：8時半か9時に創作開始、5：12時に昼食、食後浜辺までジョギング、その間ブドウ半斤〔250g〕を食べ、2時間泳ぎ、歩いて帰宅、半斤のブドウを買い、道々食べる、6：午後3時、再び創作、7：6時夕食、食後浜辺を散歩、帰宅して手紙を書き、細々としたことを片づける、8：9時から11時半まで創作、小さな西瓜をひとつ食べ、風呂に入り、体操をし、就寝」。
- 18) 蕭軍は、「彼女の手紙から、精神的に少し奮起し、情緒も比較的安定してきたことが分かる。仕事の進み具合を報告し、『少し長いのを書くつもり』と創作に向かう気持ちと計画を示している……これは私の『挑戦』（注17参照）への答えだ！」（4）と言う。

東京で書かれた作品のうち、8月14日以前に書かれたことが明らかなものは散文「孤独的生活」（8.9、約1900字）と詩「異国」（8.14）だが、詩の方は未発表である。そのほか、第六信の記述に匹敵しそうな作品として、「王四的故事」（執筆月日不明、約3200字）がある。これは上海『中流』1-2（1936.9.20）に発表されている。

- 19) 「恐らく、彼女が以前私に、卵を毎日2つ食べるようにと言い、私がそれを守っていたので喜んでいたので！」（4）。注17参照。
- 20) 蕭軍は徐家匯について次のように書いている。「我々が初めて上海に来た時、最初に『拉都路』（当時のフランス租界）に住んだ。昼食のあと、冬の日中の暖かな日の光につられ、我々はよくこの道を南に向かって歩いた。（中略）／拉都路の南の端を、こんな黒い川が東西に貫いていた！川の水は黒かったが、水面に浮かんだ大小の泡は白かった。ほころび始めた菜の花みたいに白かった。全く可笑しな対比だ！『奇観』と言ってもいい！／家として使われている木のボロ船が水面に何艘も浮かんでいた。家の中にも、船の上にも……生活している人がいた。男や女、大人や子ども、そして老人……これがその年の一1934年の徐家匯だ！」（5）。当時の東京の地図を参照すると、東京版「徐家匯」は現在の首都高速五号線の下、現在は暗渠となっている辺りだと思われる。

『我的嬌嬌蕭紅』は小学校時代に描いた鳥の絵を祖父に誉められ、「大きくなったら画家になる」と言ったとする。また中学時代は美術教師高仰山に才能を認められ、友人たちと「野外写生会」などに参加していた。哈爾濱時代は作家であり画家でもあった友人金劍嘯（1910～36）の主宰する天

馬広告社に属し、水害援助の絵画展に作品を出品している。第三十信（1936.11.24）では将来は絵画に時間を割きたいと言い、絵画を学ぶためにフランスに行きたいと言っている。この手紙に見える「パリ」の連想にはこのような背景があるのだろう。

- 21) 原文は“当作被子来用的有毛的那種单子”で、直訳すれば「掛け布団に使う起毛のあんなシート」だが、シートを掛け布団にするのもおかしいので、ここでは「毛布」を言おうとしたと解釈した。
- 22) 蕭軍は、枕とふわっとした毛布は言われた通りに買ったかどうか覚えていないと言う。「しかし夜ものを食べるという習慣は改めた。西瓜をひとつ食べるだけにした。私は硬い枕が脳の神経に障るといような医学的理屈を信じてはいない。むしろ私は硬い枕が好きだし、陶の枕や木のだって構わない。彼女は始終私のことを気にかけていたが、それが私を窮屈にしたし、うるさくもあった。これも我々に始終小さなめごとが起る原因のひとつだった。私は自分を憐れみたくはない人間だったし、他人に『憐れ』まれたくもなかった！／私はいつも楽しいことで彼女に影響を与えたいと思っていた。それによって彼女の孤独や寂寞を感じやすい心を安らげようとした。だからいつもこうしたらいい、ああしたらいいと言って……彼女が空騒ぎしたり、神経過敏になったり、私のことを心配することに精力を浪費しないようにしたのだ」（5）。

結局蕭軍は彼女の指示を守らなかったらしい。第三十信（11.24）で再び柔らかい枕を買うように言われ、また第三十二信（12.15）では夜ものを食べる習慣を改めないと責められているし、ふとんについても再び指示されている。これに対し蕭軍は、蕭紅が自分に干渉しすぎると嘆いている（32）。

- 23) 蕭軍は5円で「カメラ」をひとつ買い、何枚か写真を撮って送ったらしい（5）。
- 24) 注18参照。
- 25) 蕭紅は父親の決めた婚約者と哈爾濱の東興旅館で一時同棲していたが、妊娠が分かった後、婚約者は姿を消し、日々大きくなる腹を抱えながら、貧困の中で無為の日々を送っていた。その状況から彼女を救出したのが蕭軍である。
- 26) この第六信によれば、黄源の父親の病気が原因だったようだが、黄源の息子の妻、洪蓉芳「黄源身後三位不非凡的女性」（2000.10.5、『黄源回憶録』：2001.9、浙江人民出版社）によれば、黄源の父親は1937年の抗日戦争勃発後に亡くなっている。ついでに言うと、洪の言う「不非凡的女性」の中に黄源と離婚した許粵華は入っていない。
- 27) 蕭軍は、彼女が毎回手紙で「仕事」の進捗状況を書いて来るので、自分も先ず「仕事」の進み具合を言わなければならないかった、と言う。また現実生活の厳しさのおかげで、30歳にもなっていないのにふたり共既に老境に入ったかのように、本来夫婦の間の「情書」であるはずなのに、それを感じさせるようなものが一切ない、とも（6）。
- 28) 『唐詩三百首』のことらしい。蕭紅は幼い時、祖父からよく唐詩を習い、暗唱していたと言う（13）。
- 29) 原文はそれぞれ「1毛」「2毛」「1毛半」である。当時更級のもりそばが10～13銭、カレーライスが15～20銭、天井（並）40銭であった（『昭和家庭史年表』1990、河出書房新社など）ことからこのように訳出した。
- 30) 労山は青島の市街地に近く、古くから道教の名山として知られ、現在は中国国務院が認定する国家重点風景名勝地となっている。「私は『ガイド』をひとり雇い、自分の行きたい所に行った。『下清宮』『香玉』の舞台」にも行ったが、そこには牡丹の芽すらなかった！『牡丹の精』など言うまでもない。（中略）／労山の頂上に登ると、私は身体の周りを手で払った……さっと白雲に取りまかれ、自分が確かに『雲や霧に乗り』『羽が生えて仙人になった』ような感覚になった。／私はこれらのほとんどを彼女に書いてやり、自分で撮った何枚かの写真を添えた。彼女の大きい賞賛を得て、自分でも大いに満足したものだ」（7）。
- 31) 注23参照。
- 32) この写真が『注釈録』に掲載されている。蕭軍はなぜこの写真が今自分の手許にあるのか分からないが、確かに自分でも、また誰が見ても、この大きな目は自分ではなく、「明らかに私の顔にはめ込

んだもので、写真屋が『特技』をサービスしたに違いない」（7）と言っている。またこの写真は「恐らく夕食後町に出て散歩していた時、行き当たった写真屋で撮ったものだろうと思う。口のあたりに食事の跡が残っているから……」（7）と言うが、掲載された写真からは口の周りの証拠を確認することはできない。しかし目をはめ込む「特技」があるなら口の周りを奇麗にする「特技」があっても良さそうなものだ。写真の服装について、「上半身には白い麻の流行のジャケットを着て、きちんとネクタイを締めている。ワイシャツは恐らく襟の柔らかい、半袖の、薄緑のポロシャツで、ネクタイは当時流行していたバラ色の、斜めボーダーのものだろう」（7）と書いているが、夕食後にぶらっと散歩に出るにはしゃれ込んでいる。蕭軍独特の照れ隠しかもしれない。

- 33) 孟十還（1908～？）は雑誌『作家』（1936.4創刊）の編集者。蕭紅は『作家』に何編か作品を発表しているが、現在分かっている範囲では、送られてきたこの『作家』に掲載されるべき作品は見当たらない。雑誌のみ送ってきたと思われる。
- 34) 蕭軍は（7）で、我慢できなくなったら「飛んで」帰って来いと書いたと証言する。また小令（短い詞）の一節を引き、このように言う。「一塊の泥で、ふたつの人形を作る、男の人形と女の人形。またそれをひとつにまとめ、もう一度ふたつの人形を作る、その時彼女の中に私がいて、私の中にも彼女がいる」。そう言いながらまたこうも言う。「二匹のハリネズミのように近づきすぎると互いに棘が刺さって痛い思いをする。（中略）離れれば孤独を感じる」（7）。
- 35) 淑奇はふたりの哈爾濱時代の友人で、夫の黄田（黄之明）と一緒に牽牛房に住んでいた。黄田は蕭軍の東北講武堂時代からの友人で、ふたりを経済的に援助してくれたと言う。淑奇は後に袁時潔と改名、1937年に黄田と別れ、延安に行つて「抗日大学」女子隊で学んだ。「蕭軍簡歴年表」及び第二十三信によれば、黄夫妻は当時天津にいたようだ（注98参照）。

牽牛房は30年代初期の哈爾濱における左翼運動の拠点のひとつで、中の様子が見えるのを防ぐために牽牛花（朝顔）を植わせたことからこの名が付いたと言う。牽牛房については袁時潔「牽牛房憶旧」（『哈爾濱日報』1980.8.3）、馮羽『哈爾濱中央大街』（2004.12、黒龍江美術出版社）、平石「『牽牛房』をめぐる——蕭紅『商市街』より」（『東北文化研究の広場』第1号、2007.9）などがある。牽牛房について、袁時潔と馮羽の記述には若干の違いがある。袁は牽牛房の主人は自分と夫の黄田であると言い、所在については「哈爾濱新城大街（現在の尚志大街）の広い敷地の中にあった。敷地の奥には木材工場といくつかの職員宿舎があり、私たちの家は敷地の表門の側だった」とするが、馮羽は牽牛房の主人は彼の父親である画家の馮咏秋であると言い、「牽牛房は、初めは動物病院だったが、1929年に馮咏秋の父親が白ロシア人の獣医師から買い取って自分の住まいにした」と言う。所在地についてはほぼ同じである。

「我々の生活が極めて困難だった時、経済的に多大な援助をしてくれ、また我々がロシア語を学ぶための学費も用意してくれた。我々が哈爾濱を出なければならなかった時の旅費も彼（黄田）がひとり援助してくれたのだ。それがなければまた数日脱出が遅くなり、恐らく捕まってしまうに違いない！上海に来てからも、彼は我々を援助し続けてくれた。後で少し返したが、この情義を私は永遠に肝に銘じている。黄田は後にある劇団の俳優になり、1945年に東北に帰って病のために亡くなったそうだ」（21）。

- 36) 可能性として「家族以外的人」（25800字）ではないか。蕭紅が幼い頃に彼女の家に住候していた遠い親戚の男を描いたもので、『呼蘭河傳』（1940.12.20）の有二伯の原型である。この作品は『作家』2-1、2-2（1936.10.15、11.15）に発表された。注46参照。
- 37) ここで言う「童話（原文も同じ）」が具体的にどの作品を指すのかは不明。
- 38) 大家さんについて蕭紅が好感を持っていたことは、第十五信、第十七信、第十八信、第二十九信からも読み取ることができるが、魯迅の死を知った後の心境を描いた「在東京」では、次のように自身のいらついた感情をぶつけている。「私はとっくに大家さんの家の格子戸を開けたのに、どうやっても中には入れなくて、イライラしていた。どうして急に体が大きくなってしまったんだろう。／

大家さんの奥さんがガスコンロの脇で大根を刻んでいたが、白いエプロンをつかんだまま、鳩みたいに笑い出した。『傘……傘……』／私は傘を広げたまま上がろうとしていたらしい。／彼女のむっちりとした足は男みたいだったし、金歯もあの食堂の女給の金歯と同じだった。

- 39) 1983年に筆者は蕭紅の下宿を探したが、発見することはできなかった。1934年3月発行の「東京市麹町区地精図」に「九一五」という地番は見当たらない。飯田橋西口から東京通信病院に向かう途中に位置するそのあたりは空襲でほとんどが焼けたと言うことだが、1983年の調査では「中村」という家の痕跡すら発見できなかった。また戦前を知ると言う近所の老女は、中村という家も、中国人留学生も全く記憶にないと語った（平石「有關蕭紅在東京事跡調査」：『北方文学』1984、1月号）。
- 40) 蕭軍は、この手紙の前に8月30日付の手紙があったはずだと言う。「ここに中身のない封筒がひとつ残されており、裏に30/8と31/8返信という書き込みがある。恐らく8月30日に受け取った手紙で、31日に『返信』したのだ。中身は見当たらない。切手も誰かに切り取られている。何通かは切手のほとんどが切り取られている。薄い赤で、『参銭』と表示された日本の切手だ」（9）。
- 41) 注36参照。
- 42) 「私の魂は彼女よりももちろん大きく、広い。彼女は『尊敬する』と言っているが、彼女はこのような魂を持った人を『愛する』ことはないと思う。反対に、彼女はそれ—このような魂—が彼女の魂の自尊心を傷付けるのではないかと感じている。恐らく彼女はそれを憎み、最終的にはそれから逃れようとするだろう……。彼女は曾て私を『強盗』のような魂を持っていると罵ったことがある！これは確かに私を傷付けた。もし私がそういった魂を持っていなかったら、彼女は救われなかったに違いないのに！」（9）。
- 43) 哈爾濱時代にも蕭紅はたびたび腹痛に悩まされたが、原因が何かは分からない、痛くなると薬を飲んだが、結局それは根本的な治療にはならなかった、と蕭軍は言う（10）。中国のネット販売サイト（<http://www.997788.com/s149/36378508/> 2016.10.27 14:46）に上がっている民国期の「洛定片」の広告には、効能として「頭痛、感冒、歯痛」とある。一般的な痛み止め、及び解熱剤と言うことか。
- 44) 「『小さなアザラシ』は私が彼女に付けたあだ名だ。彼女がとてもねほすけで、普段は夜の9時、10時になると眠くなり、立て続けにあくびをする。あくびをすると両目に一杯涙がたまるし、彼女の顔は小さくて丸いから……まるで水辺を這っている、大きな目に涙を滲えた小さなアザラシみたいだったからで、決して彼女を侮辱したわけではない……」（10）。注81参照。
- 45) 原文は「凡拉蒙」。1934年8月『国際協報』掲載の広告によれば、「頭痛、歯痛、月経痛及びあらゆる痛みに効果がある」とある。Veramon。
- 46) 蕭軍はこの作品が『作家』に掲載された「家族以外の人」であろうと推測している。（11）
- 47) 注36参照。
- 48) これについて蕭軍は、残された封筒の裏には赤鉛筆でいつ受け取り、いつ返信したかが必ず記録してあり、ほとんどが「すぐに返信」と書いてあるからそんなはずはない、と反論している（11）。注40参照。
- 49) 注1参照。第十四信では、本当は5日に始まっていたのに間違えた、と言っている。

『日華学報』第59号（1936.12.25）には、ちょうど蕭紅が在籍していた10月31日現在の「学生学級別人員」の表がある。これによると在學生は全部で1611名、蕭紅は9月14日から通ったと言っている（第十四信）が、この表によれば9月14日に授業を開始したクラスは2クラス（1期7班51名、1期8班49名）で、共に授業時間は午後である。ただし手紙にあるように本来は9月5日開始のクラスだったとすれば、クラス数は全部で5クラス、授業時間はすべて午前である。第十四信の「14日に授業に出る、12時40分から4時間授業がある」という表現、及び第十九信の「午後が丸々日本語に使われる」という表現から推せば、彼女は当初在籍するつもりだった9月5日開始の午前クラスではなく、14日開始の午後クラスに在籍することになったようだ。またこの表によれば、1期のクラスは午前クラス、午後クラス併せて全部で17クラスあり（開講期はクラスにより9月5日～10

月12日の間)、更に加えて36名を集めて臨時クラス(11月10日開講)も開設され、第1期だけで898名、全在籍者数の56%を占めている。省別で見ると黒龍江省は全5名中女性は1名である。第二十六信(1936.11.2)によれば、第1期の修了は12月23日である。同じ手紙及び第二十六信で蕭紅は、第2期は通わない、と言っている。

- 50) 手紙から蕭紅の孤独と病を心配した蕭軍は、呼び戻して自分が傍にいれば健康も回復するのではないかと考え、青島に来るように言った、と言う(12)。
- 51) 9月14日から通い始めたらしい(第十四信)。注49参照。
- 52) 『注釈録』には浜辺に坐って上半身の筋肉を誇示しているような蕭軍の日焼けした写真が掲載されている。恐らくこの写真を彼女に送ったのだろう、と彼は言う(12)。
- 53) 黎烈文(1904~72)。作家、翻訳家、文学研究者。1926年に日本に留学、翌年フランスへ行きパリ大学に入学する。この間『申報』の特約執筆者となる。帰国後、1935年に魯迅、黄源らと訳文社を組織、翌年雑誌『中流』の主編となる。1946年に台湾に渡り、台湾大学で教鞭を執る(丸山昇他編『中国現代文学事典』1985.9、東京堂出版)。黄源と離婚した許粤華と結婚している(注7参照)。
- 54) 『十年』は上海開明書店が企画した小説選集である。私の『四条腿の人』(1936.11.23:『十月十五日』1983.5、山東人民出版社)はこの第二集(続集)に収録された。蕭紅は何を出したのだろうか?——出していないのかもしれない。——私は思い出せない。この選集は2冊出版され、およそ20数篇の小説が収録された(12)。筆者の調査では、蕭紅の作品は収録されていない。
- 55) 『3人の子どもたち』は東北の哈爾濱から逃げ出してきた3人の16、7歳の若者たちのことである。その中に陳という、哈爾濱にいた時の友人の弟がいた。あとのふたりは張といい、ひとり張環珊といって、哈爾濱時代、よく『国際協報』に詩歌を発表していた(12)。蕭軍によれば、上海に来た彼らから手紙を貰い、とりあえずの生活費を渡し、張環珊を杜重遠(1897~1943、吉林省出身で、日本留学経験を持つ)が勤めていた九江の陶器会社に職人として紹介したが、1945年に東北が解放されたあと、故郷に戻って警察幹部になり、伝聞ではあるが、その後自殺したらしい。もうひとりの張は自分で仕事を見つけたがその後のことは分からない。陳は「東北詩人」として活躍し、「国防文学」派の詩人となった。1946年に蕭軍が東北に帰った時にも恩を忘れずに訪ねて来たが、軍の宣伝副部長になっており、その後北京に行ってやはり軍の文化方面の部長を務めたらしい(12)。
- 56) 王関石は哈爾濱時代の友人で、画家であった。1932年に中共満洲省委が左翼作家たちの困窮を救済するために開いた明月飯店(一毛銭飯店)の資金提供者であり(支援「一毛銭飯店」:『国土金沙録』1993.7、上海書展出版社)、また同年に起こった大水害の被災者救済のために開かれた威納斯(ヴィーナス)助賑画展の出品者でもある(曹革成『我的嬌嬌蕭紅』、李述笑『哈爾濱歴史編年』2000.3、哈爾濱出版社など)。蕭軍は明月飯店の利用者であり、蕭紅は威納斯助賑画展の出品者のひとりであった。「我々は何かのことで争いになり、私が彼を殴ろうとしたところ、彼が逃げたので、煉瓦をお見舞いした。もう少しで彼の足の後ろに当たるところだった……。1936年に我々は青島で再会したが、もちろん『仲直り』した(12)。
- 57) 蕭軍によれば、袁泰も張も、1934年に蕭軍が青島で『青島晨报』副刊を編輯していた時に知り合った投稿者の若者で、当時はまだ中学生だった(12)。
- 58) 注28参照。
- 59) 『印花』は『版權証』のことで、本の最後の頁の『版權所有』に貼り、闇の本屋が海賊版を作って作者に『印税』を払わないのを防ぐものである。我々の本の『印花』も印刷所が印刷しすぎないようにするものだったが、実際には役に立たなかった(13)。

『八月的鄉村』は哈爾濱で書き始められ、官憲の目をかいくぐって関内に運ばれ、1934年10月22日に青島で書き上げられた。翌年、魯迅の援助により、奴隸叢書として上海で出版された。各版1000~2000冊を出版したが、「当時は公開された出版物ではなく、広告も出さず、秘密裡に売っていたのだが、『商売』としては悪くなかった。人々が求めているからこそ広まっていったということが分か

- るだろう。恐らくどんな『封鎖』の手段を執ったとしても阻止することはできまい」(13)。
- 60) 蕭紅が労山に行きたいと冗談を言ったことに対し、蕭軍が、足が雀みたいに細い君はとても登り切れないだろうとからかったことに応えたものである(13)。
- 61) 『江上』(1936.8、文化生活出版社)は蕭軍の作品集。「鰥夫」、「馬的故事」、「江上」、「同行者」の四篇を取録する。『『商市街』(1936.8、上海生活出版社)は蕭紅の哈爾濱時代を題材にした散文集。  
『訳文』は1934年9月16日に上海生活書店から発行された「新文学史上最初となる、外国の作品を専門に翻訳紹介する」文学月刊で、1935年9月16日、第13期で一時停刊、翌年3月16日に上海雜誌公司から復刊、1937年6月、停刊した。最初の3年は魯迅が編輯し、その後は黄源が編輯を引き継いだ(楊義他『二十世紀中国文学図志』2009.6、学術出版会)。
- 62) 電気の光を借りて本を読むという意味。貧乏学生がよく使った方法。
- 63) 注28参照。
- 64) 前日に書いた第十三信では「日本語を勉強して本が読めるようになったら帰る」と決意を述べていることと矛盾している。腹痛が彼女の心を不安定にしていたのだろうか。12月15日付の第三十二信では「帰るなんて考えたこともない」と言う。
- 65) 蕭軍はこの手紙の注に、哈爾濱にいた時ふたりでロシア語を習ったことについて長々と書いている。それによれば、ふたりの先生はフォーミナ(原文は「佛民」という19歳の、美人ではないが性格の明るいロシア人の娘で、1週間3回、1時間半の授業をするためにふたりの所へ往復30里(およそ15km)の道を、雨の日も風の日も欠かさず歩いて通って来てくれていた。15元の月謝は黄田が払ってくれていた(注35参照)。別れる時、彼女はロシア語を刺繍したスカーフをプレゼントしてくれたが、それはふたりが上海で1935年に写真を撮った時、蕭軍の首元に巻かれていたものであると言う。
- 66) 当時の『日華学報』に掲載された東亜学校関係の記事(1936年2月20日の学生募集広告:『日華学報』第54号)を見ると、初学者の蕭紅が入学した正科の学費は、第1期が15円、2期、3期がそれぞれ12円、このほか入学金1円と教材費が各期50銭必要であった。
- 67) 注16参照。
- 68) 注66参照。蕭紅が必要だったのは入学金1円、第1期学費15円、教材費50銭だったから、「21、2円」は計算上やや多めである。
- 69) 注35参照。
- 70) これについて蕭軍は次のように言っている。「日本は以前有名な『警察の国』だった。およそ日本に住んだことのある人や、日本という国の状況や社会についていくらかでも常識のある人ならおおよそ知っている。彼や彼女たち自身がこういった『警察の国』の味を味わったことがあるのかもしれない。／第二次世界大戦以前、(中略)いわゆる『刑事』(便衣警察)は日本全国ほほいらない所はなく、いない時もなく、日本や外国の人々を覗き、監視しない穴はなかった。彼らは何時であっても寝室に侵入し、好き勝手に荷物をひっくり返す。手紙や原稿なども全部だ。好き勝手にあれこれ質問し、とにかく絡んでくる」(15)。
- 71) 蕭軍は、恐らく白い背広を着て目を大きく見開いたあの写真のことを言っているのではないかと、言う(16)。注32参照。
- 72) 「彼女が10日で何枚書いたとか威張って見せ、私に賞賛しろと、『感服』すべきだとひけらかすので、その『反撃』として、彼女のことを『馬鹿な奴』と言ってやったのだ」(16)。
- 73) 上海市地方弁公室のHPには以下のような記述がある。「民国19 [1930] 年9月、信誼薬廠は食母生片、力弗肝片、蛋黃素片などを生産した。(中略)この頃 [民国8 (1919) ~1940年代] の錠剤は、痛み止め、咳止め、消炎作用などに発展があった」(上海医業志第二編第二章第二節製薬)。また『申報』(1936.9.23)には「貧血症特效薬力弗肝」という広告がある。
- 74) 第六信では「安くて、2円もあれば大丈夫」と言っていることと矛盾する。実際に医者にかかったら、予想外に高かったのかもしれない。

- 75) 注45参照。
- 76) 「上海に戻ってから、私は確かに彼女の意見に従って、45円で自分用に茶褐色で表が牛革の、綿入れにも裕にもなる膝までの洒落たコートを買った。これは多分『作家』に発表した短編小説『家族以外の人』（注36参照）の原稿料を使ったのだと思う。このコートは普段はあまり着ないで、部屋を借りに行くような時に着た。特にロシア人の経営するアパートを借りる時には、金持の『紳士』のような格好をしていなければ借りることができなかった。上海が服装で身分を判断するような社会だったからだ。特にアパートを経営しているロシア人たちは、服装を見て懐具合を判断する……人となりはどうでもよく、これこそがより大切なことなのだ。このコートは確かに貫禄があったし、『モダン』でもあった。私がまた俳優のように豪勢を装ったので、交渉は簡単に成立した。そうしなければ、たとえ部屋があったとしても、彼等は全身を眺め回し、冷たく首を振り、手を振り、一言の返事さえもせず追い出すに違いない」（16）。
- 第二十五信には蕭軍が借りた「外国人の家の部屋」への言及がある。また（9）には、蕭紅が帰国した後に住んだ家のことが書かれている。上海呂班路256弄のロシア人が経営するそのアパートは、蕭軍がこのコートを着て借り受けたものだったのかもしれない。
- 77) 蕭乾（1910～99）、作家、翻訳家、ジャーナリスト。当時は上海『大公報』の文芸版の編集者だった（16）。
- 78) 蕭紅が東京で書いた作品のうち、『中流』に掲載されたことが確認できるのは「孤独的生活」（『中流』1-1、1936.8.20）、「王四的故事」（同1-2、9.20）、「海外的悲悼」（同1-5、11.5）の3作品である。時期的に見れば「孤独的生活」と「王四的故事」を言うのだろうか。なお、『大公報』に作品を発表したか否かについては、現在のところ分かっていない。
- 79) 恐らく住所の書き方に対して注意を与えたのだろう。第三十二信（12.15）でも再度注意をしている。
- 80) 蕭軍は、第十六信と第十七信の間に「16／9」と記した空の封筒が一通あると言う。「17／9」には○が付いており、これは恐らく「返信した」という印だと思う、と（17）。注48参照。
- 81) 「小鷺」は蕭軍が蕭紅につけたニックネームのひとつである。理由について彼は、「びっくりしたり嬉しかったりすると両手を広げる、その様子がびっくりした鷺鳥（小鷺）やペンギン（企鵝）のようだったから」（18）と言っている。このほか「雀」、「アザラシ」（注44参照）などがあった。蕭紅は初めは怒っていたが、次第に受け入れるようになった、と言う（18）。
- 82) 第十七信の「不健康」のことを言っているのか。
- 83) 蕭軍は彼女が送ってくれた栗について御礼を言い忘れたので怒っているのだ、と言う（18）。
- 84) 第六信及び注74参照。
- 85) 蕭軍は労山で採った花や葉を彼女に送ったらしい（18）。注30参照。
- 86) 注49参照。
- 87) 「高架」がどこを指しているかは分からないが、中山忠三郎『高架鉄道』（1929、日本文化協会）によれば、東京における高架鉄道の計画は明治22（1889）年、新橋—上野間に計画されたのを始めとする。完成は大正14（1925）年11月であった。同書は1929年頃の状況として、上野—神田間に更に汽車4線、田町—東京間に2線増設を計画し、お茶の水—両国間は経費の関係から着工に至っていない、と言いつつ、一方私鉄の方では目黒蒲田電鉄の渋谷線の一部、池上電鉄の一部が既に高架となり、京成電車は押上—浅草間を計画中等、「此三四年の中には東京市内及其付近には多くの高架線が造られることと思ふ」と述べている。「トンネル」については、1936年当時既に開業していた銀座線を指しているのかもしれない。
- 88) 日本では20世紀初頭から広告用気球（アドバルーン）が使用された。蕭紅が日本に来る直前に起こった二・二六事件では兵士に投降を促すアドバルーンが上げられたことが知られている。
- 89) 羅烽（1909～91）は東北出身の作家で、哈爾濱時代の友人。共産党地下黨員として活動していたが、1935年に哈爾濱を脱出し、妻の白朗（1912～94）と共に上海に来る。哈爾濱での彼等の活動に関し

ては平石「星の火、広野を焼くべし」(『大正大学研究論叢』第13号、2007.3)を参照されたい。

- 90) 蕭軍は9月いっぱい青島に滞在し、10月12日に上海に戻っている。注98参照。
- 91) 蕭軍は青島に2ヶ月滞在した間に「第三代」(後に「過去の年代」と改題)第一部の後半部分と第二部の大筋を書いたほか、「水霊山島」(1936.8.10)及び「隣居」(1936.12.15)を書いたと言う(20)が、執筆年月日から見ると、「隣居」は上海に戻ってからの作品ではないか。
- 92) 蕭軍が蕭紅にあだ名を付けたように、蕭紅も蕭軍にあだ名を付けた。この手紙に見える「腕白坊主(原文は「小東西」)」、「悪党(原文は「壊得很」)」がそれだと言う(20)。注44及び注81参照。
- 93) 原文は“你還認得那是你褲子上剩下来的綢子?”である。恐らく北方人の着用する綿入れズボンのウエスト部分に縫い付けられた薄い絹の部分で、それを何かに再利用したことを言っているのではないか。
- 94) 注92参照。
- 95) 「奇」については注35参照。「小奇」は「奇」即ち袁時潔の娘。「小明」は彼女の最初の男の子。「我々は哈爾濱時代、この子をたいへんかわいがった。だが残念なことに、我々が哈爾濱を離れて1年も経たないうちにこの子は死んでしまった。このことは我々をたいへん悲しませた」(21)。
- 96) 注65参照。
- 97) 「荒波の中にいる人」は魯迅を指している(21)。
- 98) 王徳芬「蕭軍簡歴年表」によれば、蕭軍は10月1日に友人と山東省淄博に行き、日本人が経営する炭鉱を見学し、事故で両足を失い、解雇された労働者を見て「四条脚的人」の題材を得た。そこから天津に行き、黄之明(黄田)・袁時潔夫妻に会った後、北京を見物し、12日に上海に戻った。14日に黄源と一緒に魯迅を見舞い、病が少し好転したような様子に安心して自身の小説集『江上』と蕭紅の『商市街』を贈っている。
- 99) 注54参照。
- 100) 注61参照。
- 101) 日本の刑事につけられたことを言う(23)。第十五信及び注70参照。
- 102) 第二十九信(11.19)には、赤い酒は半分以上残っている、という記述がある。
- 103) 魯迅はこの前日に亡くなっており、蕭紅は「在東京」(注2参照)で、そのニュースを新聞で見たが、よく分からなかったと書いている。
- 104) 蕭紅の下宿の近くの靖国神社の縁日であろう。靖国神社では毎年10月17日～20日、秋季大祭が行われる。
- 105) この一文から、蕭軍は、蕭紅が魯迅の死を知った、と推測している(24)。
- 106) 「注釈録」では「第四十三信」として付録に入れられている。『中流』1-5(1936.11.5)に発表されたが、この魯迅を記念する特集号のために蕭紅に原稿を依頼するのが間に合わなかったので、蕭軍宛の私信をそのまま掲載した、と注釈が付いている。

魯迅が亡くなったのは19日だが、蕭軍はそれを直接蕭紅に知らせていない。それについて彼は次のように言い訳をしている。「魯迅先生が亡くなられてから、私は一方で葬儀のことで忙しかった。夜はご遺体を守らなければならなかったし、昼はご遺体に会いに来る人たちを迎えたり、招待したり、加えてそのほかの事務的なことがあり、手紙を書く時間もなく、そういった気持ちにも全くなれなかった。それに私にはこの報せを直接彼女に伝える勇気もなかったのだ!」(43)。
- 107) この「中国語の新聞」が何かは分からない。「在東京」では「偲」という文字を見たが、その意味が分からなかったとある。魯迅の死は日本の主要各紙が報じたが、管見の限りでは、「偲」が見られるのは『時事新報』の小田嶽夫の追悼文(昭和11(1936)年10月21日、22日)だけである。
- 108) この一文に対し、蕭軍は次のように言う。「この時魯迅先生は既に埋葬されていた。この無邪気な、子どものような問いかけが、どれほど人を辛くさせたか!まるで無垢の何も知らない子どもが、母親を亡くしたのに、まだ母親が帰ってくると思っているかのようだ!」(43)

109) 1898～1698。魯迅夫人。

110) 魯迅と許広平の間に生まれたひとり息子の海嬰（1929～2011）。